

## [講演要旨] 1586年天正地震による木曾川河口の被害 —長島・桑名の地震被害について—

松岡 祐也(東北大学大学院文学研究科)

### § 1. はじめに

天正十三年十一月二十九日(1586.1.18)に発生した「天正地震」による地震・津波被害は、近年特に注目され、研究がなされている地震の1つである。天正地震に関しては、飯田没事による一連の先駆的研究(例えば、飯田1987)が存在するが、史料の解釈や考察など、飯田の研究成果には見直すべき点が多いように思われる。

そのような問題点を踏まえ、報告者は昨年度、伊勢湾沿岸、とりわけ織田信雄領でもある湾奥の被害状況に関して報告を行った(松岡2016)。そこでは、①はっきりと津波被害と断定できる史料はない、②地盤変動に伴う被害が多い、③政治的・経済的な影響が大きい、という点を見ることができた。

今回の報告では、伊勢湾奥でも長島・桑名に注目し、この地域での地震被害とその影響について、より深く考察しようと思う。

### § 2. 長島の被害状況

伊勢湾沿岸の長島(三重県桑名市)の天正地震による被害は特に注目されてきた。それは、尾張・北伊勢を領有する織田信雄の居城の1つがあったこと、そして長島を構成する中洲島のいくつかが地震によって海没したとする伝承が存在することによると思われる(飯田1987はこれを津波と理解)。

天正地震により長島城で天守や御殿、門など建造物被害があったことは、地震当時の史料や江戸時代の地誌で共通している点である。また、長島を構成する中洲島のいくつかが地震によって「川と成る」「江河に変わる」というように、地盤沈下や液状化といった被害があったことが分かる。

### § 3. 桑名の被害推定

伊勢湾沿岸に点在する諸湊のなかでも、桑名(三重県桑名市)は要港の1つと考えられる。それは、第一に美濃国で伐採された木材を伊勢神宮に向けて流す際の中継地として、第二に美濃国の物資が近江国方面へ到る上での取引の地として、である。また、桑名からは渡し船も出ており、伊勢湾沿岸の諸湊とつながっていたことも分かっている。

天正地震による桑名の被害を示す史料として、飯田1987は『桑名市史補編』などを挙げ、桑名城の被害を述べているが、そこに書かれた被害が長島城のことである点を松岡2016は指摘しており、史料から桑

名の被害は分かっていたいなかった。

江上・篠原2000は近世に描かれた、中世の桑名の絵図をもとに地形を復原しているが、それによれば当時の桑名は小河川によっていくつも分けられていたこと、微低地の湿地が点在していたことを明らかにしている。このことから、桑名でも長島と同様の液状化などの被害が起きていたであろうことが推定できる。

### § 4. 天正地震後の状況

天正地震の後、織田信雄は長島城から清須城へ居城を移転している。近年の調査では、清須城も少なからず地震被害を受けていたことが分かっており、被災城郭から別の被災城郭へ移転したことになる。これは、地震の影響によるだけではない、別の理由もあったと考えられる。

木曾川河口部では、液状化などの被害による流路の変化があったと考えられるが、これは天正14年の洪水伝承へつながるのではないか。また、流路変化は、この地域の社会状況も変えたと思われる。

### 文献

江上雅彦・篠原修, 2000, 正保絵図を用いた桑名城郭の微地形復原, 土木計画学研究・論文集, 17, 83-88p.

飯田没事, 1987, 天正大地震誌, 名古屋大学出版会, 552pp.

松岡祐也, 2016, [講演要旨]1586年天正地震における伊勢湾沿岸地域の被害について, 歴史地震, 31, 179p

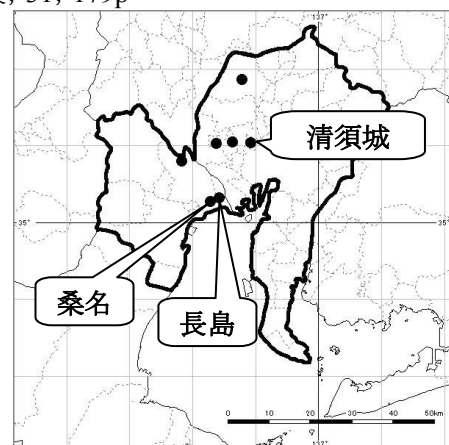


図 天正地震による織田信雄領の被害地  
黒で囲まれた地域は天正地震当時の織田信雄領(尾張・北伊勢5郡)